参考資料

放送ネットワークの強靱化に関する検討会
（第1回会合） 議事概要

1　日時　平成25年2月27日（水）　18：00～19：00

2　場所　中央合同庁舎第2号館7階　総務省省議室

3　出席者

（1）構成員（五十音順、敬称略）

一力　敦彦、小川　輝範、音　好宏（座長代理）、勝部　修、菊地　豊、木村　信哉、
久保田　啓一、塚田　祐之、中森　広道、三木　明博、山本　隆司（座長）

（2）総務省

新藤総務大臣、柴山総務副大臣、橘総務大臣政務官、小笠原事務次官、
福岡官房総括審議官、吉崎情報流通行政局長、南官房審議官、吉田総務課長、
秋本放送政策課長、野崎放送技術課長、長塩地上放送課長、
竹村コンテンツ振興課長、徳光地域メディア室長

4　議題

（1）柴山総務副大臣あいさつ

（2）橘総務大臣政務官あいさつ

（3）開催要綱（案）及び議事の取扱い（案）について

（4）座長、座長代理の選任

（5）議事

・構成員によるプレゼンテーション

・今後の進め方について

・意見交換

（6）新藤総務大臣あいさつ

５　議事概要

（1）柴山総務副大臣あいさつ

申し上げるまでもなく、東日本大震災において、情報・放送の確保の必要性ということが改めて問われたわけでありまして、その中で、やはり低地、水辺に立地するAM放送が非常に大きな役割を果たしたという実態が明らかとなっております。今日の午前中に、「放送政策に関する調査研究会」で放送政策全般の検討をさせていただいた中でも、そのようなお話がありました。震災によって、テレビやその他の通信がやられてしまう中で、いわば復興特需的にラジオ、特にAMの部分の必要性が高まりました。政府の補助も含めて、そうした部分のニーズがあったというような実態もありました。

その一方で、長期的なトレンドとして、中波、あるいは短波のこれからのニーズがどうなっていくのかということについて、極めて重要な厳しい局面を迎えているということも、放送政策トータルとして示された部分でもあります。

そのような中で、放送ネットワークの強靭化ということについて、一体どのように我々は考えていったらよいのか。また、私たちの生活習慣も変わってきて、ラジオを聞く人というなはなかなかいないのではないかというような声もあります。車に乗っている人はFM放送を聞いていますが、それ以外に、ラジオ放送というものを平時においてどう維持していくのか、あるいは設備をどのようにしっかりとメンテナンスをしていくのか。このようなところも、これから我々がしっかりと勉強して、検討していかなければいけない部分だというように思っております。

課題は山積をしているわけですが、ぜひともこういったさまざまな困難な状況を踏まえて、今後とも災害情報を国民にしっかりと提供できる、現実味のある、しっかりペイできる、そういう仕組みであるかどうかということをぜひ構成員の皆様にご検討いただきたいので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（2）橘総務大臣政務官あいさつ

私どもの若いころはインターネットもなかったものですから、本当にラジオのお世話になって、若いころの様々な思い出というのはラジオとともにあったという気がいたします。今、確かに色々なメディアがあり、ラジオの聞かれ方も大きく変わってしまい、生活とともにラジオはどうなのかということについては、色々な現状があると思います。しかし、災害時にはどうしてもなくてはならない大事な社会的なインフラであるということも、東

日本大震災等ではっきりとしてきているわけです。であれば、今日的な状況において、どのようにこのネットワークをしっかりさせて、そして、しっかり社会基盤として守っていくかということについて、皆様方の現場から、あるいは、色々なご経験からの忌憚ないご意見を闘わせていただいて、そのような中から新藤大臣以下、柴山副大臣、私ども皆で大事にこのネットワークを守っていきたいと、このように思っております。

（3）開催要綱（案）及び議事の取扱い（案）について

事務局提案の『「放送ネットワークの強靱化に関する検討会」開催要綱（案）』（資料1）及び『議事の取扱いについて（案）』（資料2）が了承された。

（4）座長、座長代理の選任

座長に山本構成員、座長代理に音構成員が選任された。

（5）議事

〇説明内容

・『災害時の放送と機能強化』（資料3）に基づき、塚田構成員、久保田構成員から説明。

・『「放送ネットワークの強靱化に関する検討会」ご説明資料』（資料4）に基づき、三木構成員、一力構成員、木村構成員、小川構成員から説明。

・『当面の進め方（案）』（資料5）及び『放送ネットワークの現状について』（資料6）に基づき、事務局から説明。

〇意見交換

【音座長代理】　私の専門としているメディア研究者の中でラジオを論じていると、どうしてもラジオ文化論になりがちでございますが、今、ご発表をお聞きいたしまして、まさに3.11の地震によって、生活者の観点からすると非常に頼れるメディアであるとラジオは片方で思われております。もう片方で、ラジオ局自体の持っている、災害にどこまで強いのか、または、そのことは少し引いて見てみますと、経営上の問題ということを含めて強靱化を考えなくてはいけないのではないかという印象を持ちました。もちろん、臨災局に関していえば、3.11で非常に早い段階で臨時災害放送局ができたことは、一つ前の

中越地震から比べると随分違う状況であり、まさにこのことも、強いラジオ、強いメディアをどのように制度的に考えていったらいいのかということにも重なるのかなと思います。あわせて、送信所の問題は非常に大きな技術的問題だと思います。そのあたりのところを総合的に、この会で議論をすることができればと思っております。

【中森構成員】　私は災害社会学、災害情報論を専攻しておりまして、災害時における情報や放送の役割、人々の意識ということについて関心を持っております。これまで色々な形で、被災地の方々に調査を行ってまいりまして、東日本大震災でも調査を行わせていただきました。過去にも、新潟県中越地震や阪神・淡路大震災等でも調査を行い、放送に対する人々の意識といったものについて、また放送局の方々にヒアリングを行いまして、色々なお考えをお聞きしているところでございます。

この東日本大震災では、今日お話がありましたように、ラジオが大変注目されました。このように、何か災害が起こりますと、そこで注目されるメディアです。今回でいいますと、SNS等の新しいメディアがとても注目されましたが、実はそれぞれのメディアには特性といいましょうか、得意、不得意が元来あります。もちろん、テレビにもラジオにもそれぞれ得意、不得意があります。ラジオの場合ですと、どうしても対象範囲が広い分、被災地域の避難所単位の細かい情報を出したくても、なかなか出せないということがあります。全部の地域を取材し、そして取材をしたものを全部出すということがなかなかできないわけです。今回の震災のように、被災範囲が大きいと余計にそういうことがあります。一方で、コミュニティFM放送の方は、対象範囲が狭いものですから、比較的そういった地域に密着した情報を出しやすいのですが、取材をする人の数や機材といったものは、どうしても大きな局には及ばないというところもあります。

そういった得意、不得意というものを持っておりますので、何か災害のときにこのメディアが一番いいという議論ではなくて、それぞれ持っているメディアの得意な部分、今回でいうとラジオはどういったところが得意なのか、どういったところが不得意なのかということを考えていき、そして災害時にどういうふうに生かしていくか、こういったことを検討していくことが必要ではないかと思っています。

【勝部構成員】　東日本大震災の時は、長期にわたってライフラインがすっかり駄目になってしまいました。電気も、水道も、ガスも、燃料も全て駄目、1週間にわたって全く情報

が途絶えた中で、市民の方々は自分の車から、カーラジオで情報をとっていたという例が多くございました。また、当時、若者から私のツイッターにも多くのツイートが来て、私の方から細かい情報を多く出しました。安否確認などは特に多くありました。

この点は、次回の会合で詳しく説明しようと思いますが、難視聴地域であるということが一つにあります。岩手県の津波の被災地の場合は、リアス式海岸でございまして、リアス式海岸というのは地盤が沈降、沈んだ地形で、今、山の尾根の部分だけが残って海面に出ており、リアス式、のこぎりの刃のような地形になっていますから谷間が多いわけです。電波が届きません。また、一関というところは同じような地形の中山間地でございまして、沢沿いに集落が点在しているということで、ここもなかなか難視聴地域で、これは昔からの課題でございました。

東日本大震災の教訓を一つのよりどころとして、昨年の４月にコミュニティFMの計画を前倒しで実行、開局いたしましたが、それでもなお、FMの電波でも届かないところがあります。全世帯に対して何とか電波を届けなければいけないということで、最後は世帯ごとに個別の対策を行うということで、全市民がテレビ、ラジオを見られるように、聞けるようにということで、現在取り組んでいるところでございます。詳しくは、次回に紹介させていただきたいと思います。

【菊地構成員】　伊豆市は、伊豆半島のほぼ真ん中で、修善寺から天城越えまで、西は土肥海岸まで、地デジ導入の際には東海総合通信局が一番ご苦労されたところだと思っております。大変有名な観光地でありながら、自動車専用道路もまだありません。光ファイバもございません。コミュニティFMはこの夏からできるかなというところでございます。また、地区によっては高齢化率が６０％、そして東海地震の発生確率が８８％という場所でございます。伊豆半島に来られるお客様は年間4,000万人です。そのような状況の中で、大規模災害時にどのような放送ネットワークが維持されるのか。そのための強靭化の検討というのは、私は大きな期待をしておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。

（６）新藤大臣あいさつ

今日は、大変に興味深いお話を伺いました。特に、震災後に頼りにされたのがラジオであり、情報と安心を得るためにラジオが使われたということでした。また現場では大変なご

苦労の中で使命感に基づいて必死の放送作業が行われたことに敬意を表したいと思います。

菊地構成員からお話がありましたように、今後、大規模な災害が起きた時に、どのように放送の強靱化というものを確保しておくかということは非常に重大な問題でありますから、色々とお知恵をいただきながら、我々としても一定の方向を出していきたいと思っております。

一方で、これに加えまして、ラジオをこれからどのように位置づけていくのか。また、お話にもありましたように、2020年には親局の半数が更新をしていかなくてはなりません。それに対しては、立地上の問題もあります。資金上の問題もあると思います。特に広告に関係するものは、今、半減しているという状況があるわけであります。施設の老朽化や、勝部構成員からお話がございました難聴の問題があります。ラジオというメディアの持つ特性を踏まえながら、どのようにこの国の中で位置づけていくのか。これには極めて大きな課題があると思っています。

事務方からもお話を聞きまして、まずは放送ネットワークの強靱化というもののご検討を賜りますが、加えて、その先のラジオのあり方というものをぜひご議論いただければ有り難いと思いますし、この課題は何年来も議論されていることであると承知しており、誰かがどこかでそういう方向性を出していく必要があります。ですから、そろそろある程度の方向性をしっかりまとめて、そして必要なものの整備を進めていく、そのような時期が近づいているのではないでしょうか。本検討会は、そのような使命を持っていただけたら有り難いと思っております。短期間でありますが、まず第1には6月をめどに集中的にご議論いただき、平成26年度予算の概算要求において、必要なところに、皆様方のこのご議論の結果を反映できるものはさせていきたいと思います。また、中長期の計画が必要であるならば、そういったことも含めて、これは実務ベースに乗せていきたいと思っております。

ですから、この検討会は、色々なご意見をいただきながら、ぜひともそういった観点も踏まえた運営をしていただければ有り難いと思います。形式的な会議で、一方通行の発表を行うだけの会議にせず、総務省にはそれぞれの専門の担当がおりますから、様々なやりとりができる会議にしていただければと思います。私も、可能な限り参加し、勉強させていただくとともに、必要なコメントもさせていただきたいと思います。

ラジオは、大変重要な使命・役割を持っており、さらには非常に長い間にわたって、国民生活の中にしっかりと根づいているメディアでもあります。また、現場の皆さんが大変に

情熱を持っておられることと推測いたします。ですから、そのようなことも取り込んで、ラジオ局についてもご議論いただければ有り難いと思います。期待をしておりますので、よろしくお願い申し上げまして、ご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

以上